

はしがき

本書は元大本営参謀（陸軍参謀本部部員）、渡辺正氏が戦中以後保存されてきた、旧日本軍がアジア太平洋地域で作製してきた地図類（外邦図）ならびに旧陸地測量部の内務省への移管等に関連する資料を記録するとともに刊行して、今後の研究に供することを目的に企画された。以下では、本書の企画にいたった経過、本書の準備過程、さらに本書におさめられた資料の意義について略述しておきたい。

旧日本軍が作製したいわゆる外邦図が、国内の大学および国立国会図書館、さらには岐阜県立図書館世界分布図センターに収蔵されていることは、地理学関係者の間ではよく知られていたが、その本格的研究が開始されたのは、二〇〇〇年になってからである。国土地理協会の研究助成（テーマ「アジアにおける植民地形成と地図作製事業」、代表者、久武哲也氏）がみとめられ、すでに判明していたいくつかの事実を手かがりに、それらをつなぐ輪を探索することになった。

国内の大学に所蔵されている外邦図のうち、お茶の水女子大学や京都大学のものについては、すでに浅井辰郎氏（元お茶の水女子大学、日本地理学会名誉会員）が『琉球列島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学にはいったか』（『大正・昭和 琉球列島地形図集成』解題所収、柏書房、一九九九年）を書かれ、とくに旧資源科学研究所に保管されていたものを配布されたことがはっきりしていた。また、この資源科学研究所保管の外邦図が、中野尊正氏（東京都立大学名誉教授）や三井嘉都夫氏（法政大学名誉教授）によって、終戦直後に参謀本部からひそかに持ちだされたもの

であったことも、中野氏の回想記（『山河遙かに』私家版、一九九〇年）から判明していた。他方、東北大学所蔵の外邦図は、やはり終戦直後に、田中館秀三講師（のち教授）の指揮のもとに、当時東北大学の助手に就任予定であった土井喜久一氏（のち静岡大学）、学生であった岡本次郎氏（北海道教育大学名誉教授）らが参謀本部から運び出したものということであった（田村俊和「地図を生かす」、『東北大学の宝物』東北大学教育学部、一九九八年）。

こつしたなかでとくに注目されたのは、終戦直後の参謀本部からの外邦図の持ちだしに際し、多田文男東京帝国大学助教（当時）の指示を受けて、中野氏が面会されたという渡辺少佐であった（上記『山河遙かに』）。この渡辺少佐が、米軍による接収が予想されていた外邦図を、大学側に仲介されたことがあきらかだったからである。ただし、渡辺という姓と少佐という階級しかわからず、またすでにそつとつの高齢に達しておられると予想され、これ以上のアプローチは不可能と考えていた。

こつしたときに、渡辺少佐がご健在であることを、金澤敏知氏（元国土地理院長）からお知らせいただいたのは、二〇〇三年夏に沖縄国際大学で開かれた日本国際地図学会大会のときであった。当初は信じられない気持ちであったが、すでに科学研究費による「外邦図の基礎的研究」は着々と進行している時期でもあり、以後渡辺氏のお話を外邦図研究会でおうかがいできればという気持ちがつよくなっていった。またこれに際しては、中野尊正氏、三井嘉都夫氏のご出席も得て、当時の経過を記録に残しておきたいという希望もわいてきた。

二〇〇三年十一月八日に駒澤大学二四六会館で開かれた第四回外邦図

研究会に、渡辺氏、中野氏、三井氏にくわえて、佐藤久氏（東京大学名誉教授、日本地理学会名誉会員）、浅井辰郎氏もご来場いただき、私たちの希望がかなえられるだけでなく、これらの方々にとっては数十年ぶりの再会が実現することとなった（『外邦図研究ニューズレター』2号参照）。すでに高木勲氏（ジオテック・リサーチ）および金達氏が、渡辺氏所蔵資料の電子化を進めており、その成果をふまえて、この研究会で金達氏からあきらかにされたのは、つぎのような事実であった。第二次世界大戦末期に、日本本土を戦場とする最終的な戦闘が予想され、そのための研究会（「兵要地理調査研究会」）が、渡辺氏によって地理学者を中心に組織され、そこでできあがった渡辺氏と地理学者の交流関係が、終戦直後の大学関係者による外邦図の持ちだしに大きな意義をもったのである。

第二次世界大戦に際して、連合国側においても地理学者はさまざまなかたちでそのマカラムミックな能力を提供したという点からすると（たとえば Balhin, W.G.V. United Kingdom geographers in the Second world War *Geographical Journal*, 153 (2), 1987）上記のような軍と地理学の関係は単純に評価できるものではない。「兵要地理調査研究会」については、さらに今後の調査が必要であるが、渡辺氏所蔵資料からみれば、両者の研究内容に類似した側面がみとめられる点も注目される。

ともあれ、このような軍人と地理学者の協力関係が、結果として外邦図の今日の残存につながったという事実は、私たちの疑問のかなりの部分を氷解させるものであった。また、軍と地理学の関係という点、京都帝国大学を中心とする地政学グループがよく話題になるが、短期間とはいえ、多田文男東京帝国大学助教（当時）を軸とするこの研究会につい

ては、まったくといってよいほど学会には知られておらず、地理学史にも注目された。その位置づけはすぐには容易ではないが、そうであるからこそ、ますます渡辺氏所蔵資料の公開が望まれることになった。

渡辺氏所蔵資料の重要性はこれにとどまるものではない。このなかには、終戦直後の外邦図を中心とする地図類の焼却処分に関連する資料もふくまれている。渡辺氏によれば、当時の参謀本部は混乱状態にあったということであるが、外邦図が軍事的にどのように位置づけられていたかを示唆する重要資料といえよう。

このようななかで、渡辺氏は終戦直後から陸地測量部の民政機関への移管を構想する。戦後復興における地図作製機関の必要性を痛感し、日本陸軍の解体という不可避のプロセスから、陸地測量部を救うことを意図し、早期のその内務省への所属替えを実現することになったのである。これによって生まれたのが地理調査所（現国土交通省国土地理院）である。渡辺氏所蔵資料は、この過程を考えるに際し不可欠の素材で、今後のさらなる研究が待たれる。

さらに情報将校であった渡辺氏の兵要地誌に関する関心も無視できない。旧日本軍、とくに旧陸軍は、アジア太平洋地域の地誌的研究を長年おこなってきた。もちろん軍事行動を主目的とするものであったが、その成果についても、戦争の終了とともに廃棄すべきものではないと考えられていたのである。

地図そのもの、地図作製、さらに軍事地誌と、いずれも外邦図研究だけでなく、地理学史の主要テーマに関連するのが渡辺氏所蔵資料の特色である。また、これらにとどまらず、軍事史、近代史にとっても渡辺氏

所蔵資料の刊行は意義あるものと判断された。ただしこの場合、資料の性格からして、事前に調査をおこない、その背景等についてしっかりと解説を付す必要が痛感された。また渡辺氏所蔵資料は、その全容を視野にいれたうえで利用されるべきものであり、断片的な引用は望ましくないと判断された。これにむけて、編集委員会を構成し、二〇〇四年一月以来前後四回ほどの会議をおこない、刊行の準備を進めてきた。この作業の成果が本書である。本書では、そこでの議論をふまえ、渡辺氏資料を大きく四つにわけて示すとともに、解説をくわえている。

ここであえてことわっておきたいのは、この編集にたずさわった者の世代や専門的背景がかならずしも同一ではなく、時には本書の構成をめぐって長時間の議論をおこなってきたという点である。いくつかの点について、まだ見解がかならずしも一致しておらず、用語等もかならずしも統一されていない。たとえば、一九四五年八月に終結した戦争は、「大東亜戦争」と書かれる場合もあれば、「第二次世界大戦」、さらに「太平洋戦争」と表記される場合もある。それぞれの用語はこの戦争に対する見方の違いをある程度反映するものであるが、無理に統一することをこころみていない。

ただしここで明記しておきたいことは、編集委員会のメンバーは、こつしたちがいをお互いにみとめつつも、渡辺氏所蔵資料の重要性の認識と、いくつかの点では一致しているという点である。渡辺氏所蔵資料は、そうした見方の違いをこえて、多くの人に参照されるべきであり、またその意義について今後さらに研究がくわえられるべきものであることを、編集参加者を代表してあらためて強調させていただきたい。

末尾になるが、ご所蔵の貴重な資料を私どもに開示して下さい、また編集プロセスに終始関心をよせてくださった渡辺氏のますますのご健康と長寿を願ひ、この「はしがき」の結びとしたい。

なお、本書の編集に際しては大阪大学文学研究科助手、鳴海邦臣氏、同大学院生・特任研究員 渡辺理絵さん、同大学院生 波江彰彦君、同文学部学生、富岡玲子さんのお世話になった。記して感謝したい。

二〇〇五年三月

小林 茂